

## 新入学生を迎えるに当たって

山梨県立大学理事長 兼 学長 伊藤 洋

今日、ここに横内正明山梨県知事・芦澤薫元副知事をはじめ山梨県内各界の要路のみなさまにご列席を賜り、国際政策学部 102 名、人間福祉学部 94 名、看護学部 106 名、さらに看護学研究科修士課程 11 名、合計 313 名のフレッシュマンをお迎えできたことを心からうれしく思います。今年の本学の門は例年に比べて狭く、これをくぐり抜けるにみなさんは難儀したことと思います。それだけに入学生の皆さんの労を労うとともに、皆さんを今日まで支えてこられたご両親・ご親族、また幼時教育から学校教育を通じてご指導を賜った先生方に心からお喜びを申し上げたいと存じます。

さて、初めに重要なご報告がございます。それは、去る 4 月朔日より山梨県立大学は、「公立大学法人山梨県立大学」の経営する「大学」として、法人格を取得いたしました。・・と申し上げてもよくお分かりにならないかも知れませので若干の説明を加えておきましょう。

山梨県立大学は、去る 3 月 31 日まではその名の通り「山梨県」が「直接」設置する大学でありました。平易な言葉で言えば、山梨県庁配下の様々な出先機関の一つとして、山梨県の設立趣旨に沿って高等教育を業務分担することが求められていた組織でありました。これに対して、大学が「法人格」を取得して、独立した人格として大学を自主的に経営すること、これが法人化ということの第一の「定義」です。そして、設置者としての山梨県とは、

山梨県知事が提示する「中期目標」を、大学法人が確実に履行するという「契約関係」によって結ばれていくこととなります。

本学としては、向こう6年間で一期とする期間中に、山梨県知事から示された「中期目標」に対して「中期計画」を示し、かつこれを下に「年次計画」を策定して、これを着実に実行していくこととなります。この「計画」は、山梨県知事と本学との「契約関係」ではありませんが、そのまま「在学生との契約関係」でもあります。これらのすべては後刻県議会の同意を得てから本学ホームページに全文掲載されますので、皆さんもこれを読んでおかれることをお勧めいたします。

以上を要するに、山梨県立大学は、四月一日をもって新たな出発を致しました。その学則第1条には、「**山梨県立大学は、『グローバルな知の拠点となる大学』、『未来の実践的な担い手を育てる大学』、『地域に開かれ地域と向き合う大学』たることを希求し、人間と社会に対する学術的研究、豊かな人間性及び専門的な職業能力を備えた人材の育成並びに地域社会に対する実践的な貢献を通じて、豊かで活力ある社会の発展に寄与することを目的とする**」と書かれています。

これを要するに、公立大学法人山梨県立大学は、「ここ山梨の地にしっかりと根を張って、地域の知の拠点としてのシンクタンク機能を果しながら、かつここで学ぶ者たちには実践的な力を授け、その実力をもって世界に羽ばたいてもらう」というミッションを掲げているのです。

山梨県立大学は甲府市飯田と池田に小さなキャンパスを持っていますが、そこはあくまでも座学を身につける場所に過ぎなくて、学生が実践として学ぶ場は山梨県土の全面積4,465平方キロメートルの全てです。当然、3,776メートルの富士山や3,193メートルの南アルプス北岳などの山頂も、あるいは富士五湖の湖面から富士川の激流まで、また国中や郡内地方に広がる広大な果樹園や黒い森まで、その全ての空間が山梨県立大学の

キャンパスだと思っていただいでよいでしょう。これが、学則第一条に言う「**グローバルな知の拠点**」です。

皆さんは、この空間で起っている人情と自然の法則性を学ぶことを通して、世界と地域をまたに駆けて活躍できる人材となること、これが皆さんに寄せられる県民からの期待の一部始終なのです。

さて、こうして皆さんは新たな学びの門をくぐることになりましたが、皆さんを取り巻く社会はいま大きな岐路に立たされています。すでに一昨年秋のリーマンショックとその後の世界経済の混迷は皆さんもよくご存知でしょう。「これは百年に一度の津波のようなものだ」とアメリカの連邦準備制度理事会（FRB）前議長のグリーン・スパン氏は言いました。この「大津波」の影響を最も大きく受けたのが他ならぬ日本でした。その結果、国民所得は激減し、失業率が増大し、若者の就業機会が閉ざされて、就職できない大学新卒者が急増していることは新聞報道などで皆さんもよくご存知でしょう。2月1日現在、全国773の国公立大学の平均就職率は80.0%程度に止まっていて、これは戦後の一時期を除いて最悪の数値です。さいわい、山梨県立大学は、就職意思を持っている学生についてはほぼ百パーセントを達成しました。この数値は、全大学中でAランクに属します。

それはともかく、この「不況」は今後回復するのでしょうか？「朝の来ない夜はない」の喩えで言えば脱出できない不況はない道理ですが、今の混迷からの脱出はそう容易ではありません。それは、近代の経済社会を支えてきた源泉が「石油」であったこと、そしてその石油の枯渇が目に見えて始まってきたことの為です。特に、躍進著しい中国やインドにおけるエネルギーと資源の莫大な需要の発生が見込まれることが、決定的に「枯渇」を早め、結果的にエネルギー価格の高騰を招いているためです。石油の枯渇は、消費財の製造コストを引き上げますが、わが国の製造技術は、

高い技術革新（イノベーション）によって他国の追随を許さなかったために、今まで問題が潜伏していた見えなかったのですが、東アジアに技術がトランスファーされていくにつれて、その優位性が見えなくなってきました。これが、同時不況の中で日本が特に大きな打撃を受けている理由だと思われます。つまり、皆さんの頭上には、「油の切れた社会で生きる」という重い課題がのしかかっていると言うことができるのです。

そこで、ちょっと、石油の話をしていきましょう。近代の石油産業のはじまりがアメリカだったということは意外に知られていません。そして、これがたった150年の歴史しかないということも、です。

今から丁度150年前の1859年8月28日、アメリカ東部のペンシルベニア州の片田舎で、鉄道会社の車掌だったドレークという男が地下20メートルの地中から約30バレルの石油を汲み上げたというのが、そもそも石油の始まりでありました。それまで世界一の捕鯨国家アメリカのこと、灯油などの液体燃料としては専ら鯨油が使われていましたが、その悪臭といい、流通の不安定さといい、あまり具合の良いものではありませんでした。そこへ文字通り湧き出した石油は、その匂いすら魅力的で、たちまち人々の魂をとりこにしました。いきなり、1バレル16ドルという破格の高値がつきました。このように、近代石油産業は生まれるやいなや札束を産着にして迎えられたのでした。以来、高騰につぐ高騰、暴騰につぐ暴騰を繰り返し、今や1バレルが100ドルという史上最高値を記録するまでに「成長」したのです。

国際原油市場の価格の推移を見ますと、暴落の歴史はたった二回しかありません。その最初は、上述の発見の翌年、儲かることの分かったドレークと彼を支えた資本家らは、増産につぐ増産を図りました。その結果、商品がだぶついて一気に16ドルから0.5ドルまで値崩れしたのでした。これが第一回目の暴落です。

しかし、やがて 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて自動車産業が誕生し、石油需要は飛躍的に増大していきます。また石油は、火力発電から船舶や航空機の燃料としても、また石油化学製品として膨大なコンビナートを結ぶ原料資源となるに及んで、石炭の座を奪い取って「産業エネルギー」の中心に、そしてやがて政治・経済をも支配する「政治・経済エネルギー」へと成長していきました。

そういう政治エネルギー化の中で、1970年代、OPECによる減産政策が石油危機を招きましたが、この暴騰の直後に二度目の暴落を記録したのは記憶に新しいところです。このように、原理的にほとんど値崩れのない商品、これが石油の特徴です。これは、油井が次々と枯渇していくこと、それによって価格が上昇すると、その上昇した価格に見合って、僻地の油田開発が現実化するためです。資源の枯渇が叫ばれながら、今まで石油が消えない理由もまたここにありました。その結果、たった150年間で地球の環境汚染は極限にまで達し、地球温暖化が叫ばれるところまで来てしまったのです。

石油の欠点は環境問題以外にもあります。それはこれが偏在しているということです。日本の東南アジア進出とその野望を打ち砕く太平洋戦争は畢竟石油戦争でありましたし、近くはイラク戦争も石油利権にまつわる争奪戦に他なりません。石油が戦略物資であるかぎり、それを支配する利権争いからくる国際間の政治的不安定は石油に生得のものと言わざるを得ません。その石油が、いま枯渇し始めました。今後、国際社会が不足していく石油を求めて激しく揺れ動くであろうことは想像に難くありません。再び、私達が過去の一時代のように誤った選択をしようとするかも知れません。

**大急ぎで話を追加しておきますが、エネルギー源としての石油** に対しては、私たちの前には「水素」や「マグネシウム」など、

夢を紡ぐことのできる希望のエネルギーがあります。これらは、地域的に偏在せず、世界中どこでも入手可能で、かつ無尽蔵にあって、しかも永遠に無くならない、原理としての循環型エネルギーです。しかも、これらをエネルギー源とする機械文明は人間社会にすべて既存のものとして用意されています。ただ、現在経済効率的にこれらを生成獲得する技術がないだけです。つまり、人類社会の前方は決して八方ふさがりではないということをも言い添えておきましょう。つまり、厳しい環境にありながらも夢は有るのだ、ということです。

こういう時代状況の中で、私達は如何に生きていくべきか、皆さんの大学生活はこういう大問題を抱えた時代の中で始まるということをしかりと意識の中に留めておきましょう。向こう4年間「のんびんだらりん」を決め込むわけに行かないことは言うに及びませんが、こういう時代に自分はどのように地域や世界に貢献できるのかを考えながら学んでいかななくてはなりません。

本学では、この春から新しい学内機関として「キャリアサポートセンター」を新設いたしました。皆さんが、充実した人生を送るためにはどのようなターゲットを定めてキャンパスライフを送ればいいのか、目標とするプロフェッショナルに到達するためにはどういうキャリア・パスを選択していけばいいのか、そのためにはインターンシップなど社会的訓練を在学中に送るべきか、「プロへの途」を指導して参ります。強い意志を持って、激動の時代に生きる確固たる「生きる力」を養ってください。

しかし、時には「青春の蹉跎」なるものに捕らえられることもあるでしょう。本学の先生方は私が信頼する立派な教員ばかりです。困ったときには、そこに立ちつくさずに近くの先生を訪ねてみなさい。あるいはこれもこの春新設したばかりの保健センターのドアを開けてみるのも一法です。また、私も、池田キャンパスと飯田キャンパスでそれぞれ火曜日と水曜日1時間ずつ「学長オ

フィスアワー」を開設しています。昨年は延べ百人の学生と面談致しました。勇気を出して両キャンパスにある学長室のドアを叩いてみて下さい。そのとき、視界を邪魔していたウロコが落ちるかもしれません。

以上、皆さんの今後の健闘を祈りつつ歓迎の言葉と致します。  
ご清聴ありがとうございました。